
5. 暴力件数減少に向けて ～個別看護推進による暴力の少ない環境作り～

川口病院 西3階病棟 関口裕太郎 松田 優介
星野 兼一 佐藤 幸子

はじめに

昨年度の川口病院西3階病棟では、患者から患者、患者からスタッフに対する暴力件数が多く発生していた。その為今年度当病棟では暴力件数減少に向けた取り組みを行う事となった。当院以外の精神科病院でも暴力がしばしば問題となっていることが調べていく中で分かってきた。また暴力を防ぐためのプログラムを研究し発表している精神科医師もいる。

岡田は「予期困難なリスクを最小限に留めるには、繊細な観察と患者との継続した豊かな意思疎通、すなわち最良の治療と看護に頼らざるを得ない。」と述べている。患者1人1人に対し個別看護を徹底、実施し患者の状態やニードの把握と実現を後押しし暴力減少を図る。社会の人が疲労やストレスを感じた際の対処行動として、スポーツやマッサージ、活動や息抜き、癒しを求めるといった普段とらない非日常的な行動をとる。

今回この非日常的な行動に着目し、病棟全体を1つの個と捉え、慢性期閉鎖病棟での非日常的行動は何かを考えたところ、限られた空間で生活しているため外出や屋外での活動を提供することが当てはまるのではないかと考え、定期的に患者の気持ちを開放する場を設ける。患者1人1人と病棟への個別看護と気持ちを開放する場の提供により暴力減少へ効果がみられたためここに報告する。

研究目的

対患者、対スタッフに対しての暴力がある

事は、患者の安心した療養生活への妨げとなっている。患者の安全と安楽を確保するためにも本研究において暴力件数減少に向けた取り組みを行う必要がある。

研究方法

研究期間：平成27年5月1日～10月31日

- ①各スタッフの受け持ち患者（約5～7人）に対し、各受け持ちスタッフが個別看護を実施。
- ②1回の関わりを10～20分程度1人の患者に確保する。
- ③1週間の勤務で受け持ち患者全てに対し個別看護を実施する。
- ④個別看護を可視化し、徹底していくために週替わりの表を作成し、実施内容や時間を記載する。

これらをルールとして定めて病棟スタッフに対し実施してもらう事とする。この他に慢性期閉鎖病棟の為、長期入院患者が多く長期間にわたり外へ出ていない患者も多数存在していた為、スタッフ同伴にて病院屋上へ出向きラジオ体操やレクリエーションを実施する。これらの取り組みを行い、患者の表情や言動の変化、暴力件数や暴力事件の度合いの変化を昨年度と比較し、本研究の有効性を証明していく。

暴力の度合いの指標として現在川口病院で使用されているレベル分けに準じて行う。

レベル0：暴力を振りそうになるが未然に防いだ

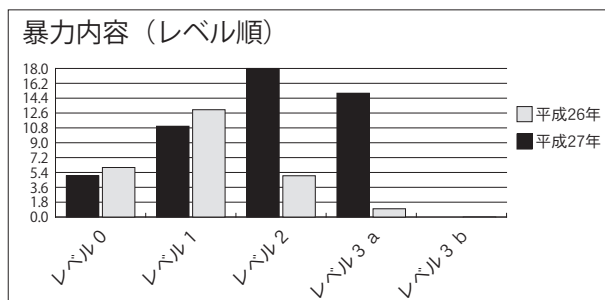
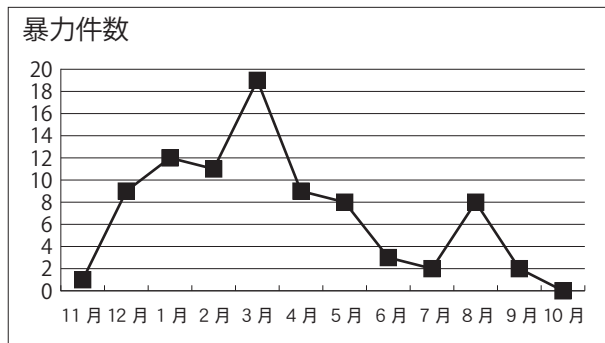
レベル1：暴力があるも外傷なし

レベル2：暴力行為により安全の為検査を実施

レベル3a：暴力行為により他科受診頓服薬を使用した

レベル3b：暴力行為により骨折・点滴加療・モニター管理等が必要になった

結果



研究の取り組みによる患者の言動や変化
「今日は外でラジオ体操しないんですか、行きましょうよ、気持ちいいから」
「来週受け持ちさんと外出行くんだ。いいでしょ。何買うかメモしとこう」
「あいつムカつくんだよ。殴ってやろうかと思った。ちょっと聞いてくれる」

研究取組後、患者は自身が行いたい事（外出や退院後の生活）について、受け持ち看護師やその他の看護師に対し相談しようとする姿が以前に比べると増加した。また看護師も受け持ち患者のニードに対し応えようと外出を計画することや、退院に向けての日常生活指導や服薬指導など取り組む様子がみられてきた。

考察

グラフより昨年の11月より暴力件数が上昇し、今年度の4月より減少傾向となった。ま

た5月より本研究の取り組みを開始しさらに暴力件数は減少していることが分かる。これは、病床の管理や薬剤調整などの要因も考えられるが、本研究の取り組みにより減少させることができ、効果的であったことがうかがえる。個別看護を推進したことは、患者とスタッフ間の関係性をより強くし、関わりの中で小さな患者の変化に気づき対処を行うことができた。また患者のニードを把握し、ニードを実現するために患者との外出訓練や服薬指導、退院前訪問、日常生活指導や訓練といった患者と共に行う取り組みが以前より増して行われるようになった。また患者から他患者に対し『怒り』を覚えた時には手を出すのではなく、スタッフに声をかけ話しを聞いてもらうといった自身で暴力を起こしてしまう前に対処するといった行動もみられるようになっていった。

グラフでは8月に暴力件数が上昇している。これは病棟で8月の真夏に屋上へ患者を誘導した際の体調不良を懸念し、屋上へ出向く回数が減ったためであると考えられる。その後8月の暴力件数上昇について、病棟ミーティングにおいて他職種の方の意見をふまえ検討し、当初時間をかけてラジオ体操やレクリエーションを実施していたが、滞在時間を短縮し屋上へ週4～5回行く、活動の場を広げる方法へ変更。その結果9月には再度暴力件数減少の傾向がみられた。これは、患者を屋上へ誘導し活動の場を広げ、定期的に気持ちを開放する場を提供出来ていたことが暴力減少に対し効果的であったと考えられる。

結論

- ①暴力減少への取り組みを実施する前に、以前までの暴力事件を検証し、現状での考える有効な取り組みについて話し合いを行うことが重要である。
- ②個別看護を推進したことにより患者とスタッフとの関係性構築へと繋がり、細かな患者の観察とニードの把握と実現へ繋がり暴力減少へと繋がった。

-
- ③非日常的な要素を取り入れたことは、患者の病棟生活でのストレス軽減や暴力減少へと繋がった。
- ④話し合った取り組みを一定期間実施し、改善点を再度話し合う場を設け、現状の病棟にあった取り組みへと変更していくことが大切である。

まとめ

本研究の取り組みにより、当病棟では暴力減少へと繋がった。精神科暴力について様々な研究や防止プログラムが発表されているが、今回看護で出来ることは何かを、一番病棟全体と患者1人1人を分かっているスタッフが考え実施した。そして暴力件数が減少したことから個別看護や気持ちを開放する場を設けたことは有効であったことが証明できたと考える。今後もスタッフ間で話し合いを行い患者が安心して安全な療養生活を送れる場を提供できるように取り組みを継続していく。また患者との関係性を大切に、今後もより良い看護へ繋げていけるよう努めていく。

参考文献・引用文献

- 暴力と攻撃への対処－精神科看護の経験と実践知
岡田実
精神科看護 第40巻 通巻250号 2013年6月20日
発行
「暴力」の予測は可能か 下里誠二
「暴力」を出来る限り発生させない環境を作る為に
岡田実
-